

ウイリアム・ジェイムズ、ジヨサイア・

ロイス、新渡戸稲造

——その日本理解の確執と限界——

鷗木 奎治郎

日露戦争が終った時、新興国日本の台頭に衝撃をうけた二人のアメリカ人哲学者がハーバードにいた。一人は自他共に許すブラグマティストのウイリアム・ジェイムズ (William James, 1849—1910) であり、他の一人はアメリカには珍しい観念論者であるジョサイア・ロイス (Josiah Royce, 1855—1916) である。ジェイムズはロイスの誠実な性格をこよなく愛好し、自分と全く傾向の異なる哲学者を同僚として招いたのである。二人の友情は終生、変ることがなかった。

だが両者の日本に対するアプローチの仕方は非常に異なっている。ジェイムズはその死の直前、「戦争の道徳的代替物」(「The Moral Equivalent of War」, 1910) を発表し、日本の軍国主義に対す

る危惧を表明した。ロイスの場合は『忠誠の哲学』(The Philosophy of Loyalty, 1908) その他の諸論文で、彼の好意的な日本観を説明している。ところが太平洋の掛け橋を以て任じていた我が新渡戸稲造 (1862—1933) は、既に日清戦争終了後の一八九九年に英文の *Bushido* をアメリカで執筆し、一九〇〇年にフィラデルフィアで出版していた。そして更に日露戦争が終結した一九〇五年に第10版をニューヨークで出し、増訂までほどこしている。この執筆と増訂の微妙な時期に注目する必要がある。日本語版『武士道』が出たのは、もっと遅れて一九〇九年になっている。

拙論では先ず第一に、ジェイムズとロイスの日本観が、我々日本人自身が抱いている日本観——というより、特に新渡戸がアメ

リカ人に紹介しようとした日本観と、どんなに異なるかを検討する。ついでジェイムズとロイスの哲学思想が、その日本観にどのように反映しているかを調べて、比較思想の研究者として、どちらがより妥当性があるかを結論づけたい。

一 ウイリアム・ジェイムズ

日本の軍国主義への素朴な恐怖 ジェイムズがその死の直前に書いた「戦争の道徳的代替物」の中で表明している日本への恐怖はただ事ではない。それも一介の軍人にすぎないホーマー・リー將軍 (Homer Lea) の物した若干、扇動的な『無智の勇氣』(The Value of Ignorance, 1908) の受け売りである。即ち現代人は凡て本質的に戦闘的気質を継承しているが、なかでも日本の軍国主義的気質は顕著であると説く。既に日清・日露の両戦役、更に日英同盟の余波を借りて「壮大な侵略政策」^(1.664) に乗り出した日本は、この調子で行くとやがて「フィリピン・ハワイ・アラスカを攻略し……遂に凡ての太平洋海域を支配するに至る」と予測する辺りは、ほぼ正確に日米戦争の未来図を描き出しているから、読む方も一応驚いてしまう。ところが「アラスカ・オレゴン・南カリフォルニアは殆どろくな抵抗もしない中に陥落し、サンフランシスコも二週間^(1.665)で降伏するに違いない」という事になると、日本も酷く買いかぶられたものだなど、片腹痛くなる。続けて「陰惨な予測だ。然しもし日本を牛耳る政治家達がシーザーのようなタイプだとし

たら——実際の歴史を紐解くと正にその通りなのだが——この予測が荒唐無稽だとは言いつれなくなるから恐いなだ」^(1.665)と結論づける。こうなると、これが果して当時としては最大級のアメリカの知識人の言葉だろうか、我が耳を疑いたくなる。結局、アメリカは瓦解し、シーザーのようなタイプの指導者が現れるまで再統一は難しいだろうとジェイムズは絶望に陥る。

以上の考えは、一見、日本をアメリカと正反対の国是を持つ国と見立てているようだが、結局は日本の「太平洋制覇」を問題にしている以上、アメリカも同じ地政学に基づいている同質の国家だと承認している事になる。但し日本にはシーザーがいてもアメリカにはその可能性がないという以上、如何にも日本人は不可解であって人種が違う、と言わんばかりである。

そのプラグマティックな哲学的構造 さてジェイムズは哲学者を二分して、合理性と観念論にこだわる柔軟なタイプの気質 (soft minded) と、あくまでも経験を重視する唯物論的なタイプの気質 (hard minded) とに分類した。ここではそれに対応するかのよう^(1.663)に、平和主義の論理と理想にこだわる平和屋 (the peace-party) と、あくまでも現実の弱肉強食の政治を重視する戦争屋 (the war-party) とに人間を区分している。そして、両者の描くユートピアがそれぞれに抽象的・仮説的であるにすぎないと断罪した上で、改めてジェイムズ自身が別な第三のユートピアを提案する。一見、日本に於ける、憲法第九条是非を問う不毛な論争を思わせ

るが、ジェイムズは凡ての議論を（彼自身の議論も含めて）絶対化せず、一種のプラグマティックな仮説構成と見ている点が異なるのである。

ついで「平和」と「戦争」という言葉は同義語^(1.663)であり、「諸

国家の間で次の戦争に備えて激しく競い合う」状態がとりも直さず「真の戦争である」と説く。曾てジェイムズは木の周りをグルグル走るリスを追いかけている人間を考えて、果してこの人間がリスを回っていると言えるかどうかを問題にした事があった。この時、彼の出した即興的な解答は、それは回る、という言葉のプラグマティックな定義如何によるというのであった。ジェイムズの戦争の定義は、このリスの挿話を思わせる。この定義ならついでこの前まで続いた、米・ソの冷戦構造も巧く言い表わす事ができる。

第三にジェイムズが問題にするのは意識である。「軍国的な気質」というものは、たとえ今、行使しないにせよ、それ自体が究極の目的物であると考えて、貯えておくことが人間としての義務である^(1.664)。こういう言明は、その軍国的な気質の内容・価値はさておき、平和を論ずる時の意識には、必ず戦争についての意識が随伴している、と主張しているのだ。だからこの場合、平和という意識の中心部分だけでなく、その周辺の戦争という意識の部分が実にはほとんど占めているという事になる。さらでだに彼は、意識が不変の内容を持った固定的な感覚ではなく、切れ目なくつながつた流動的な行動形態であると把握していた。だから平和な時期

(*peace interval*) を、戦争と戦争の間をつなぐ一時的な現象と見なすようになったのは、彼の哲学の論理から当然、帰結される社会認識なのである。

ところが、第四に、彼は戦争と平和の問題を、単なる哲学的仮説や、要素心理学的分析の枠組みの中だけで片付ける事ができなかった。その名著『宗教的経験の諸相』(*The Varieties of Religious Experiences*, 1901—02) が、厳格な宗教学の著作というより、むしろ当世風の臨床心理学あるいは社会心理学の嚆矢として位置づける事ができるように、結局は、生物学的・社会学的推論に帰結していくのである。即ち「大衆の世論が、いったん戦意高揚の路線で弾みがついてしまうと、もうどんな支配者でも抵抗できなくなってしまう」というのである。つまり「軍国主義的傾向のある著作者」にとつては、「戦争は生物学的あるいは社会的立場からみて必然的なのであって、通常の心理的なチェックや動機づけではもはや制御が利かなくなる^(1.664)」のである。ここには戦後の日本で流行した、悪いのは軍国主義にかぶれた施政者だけで、民衆はその犠牲者であったという、若干マルクス主義的な陳腐な解釈が入りこむ余地は何処にもない。

戦争の道徳的代替物　ここからジェイムズの戦争防止に関する心理的・社会的な提案が出てくる。彼が軍国主義的勇氣を称揚するのは、それが「個々の人間を熔接して集合体にまとめ上げる^(1.665)」力があるからに他ならない。更に「こういう美点なら平和時にも役

(1.666)に立つて」と押さえるだけでなく、これなくば「道德的退廃」(1.665)と来るのだから、極度に個人の立場を尊重していた筈あるのみ」と来るのだから、極度に個人の立場を尊重していた筈のジェイムズとしては、随分、思い切った主張ではある。つまりいわゆる平和屋が「戦争によつてもたらされる規律とか熱情に機械的に匹敵するような道德的代替物を提出し損ねている。」と判断したジェイムズは、自分でその役を買って出るのである。

だが張り切つて登場したわりにはその内容は意外にも陳腐である。要するに精力を持て余す青年を一定期間徴兵代りに徴集して、「炭鉱、鉄鉱、貨物列車、十二月の漁業、皿洗い、洗濯、窓拭き、道路建設、トンネル造り、鑄造、ボイラー、高層建築物の基礎工事」といった労働に従事させて、集団の一員としての責任感を養う、といった程度の事にすぎない。これでは戦争の道德的代替物というより、肉体的代替物にすぎない。まるで性欲を発散させるためにスポーツを奨励する批評家の態度にも似ていて、今日で言う開発途上国への平和部隊といったような理想を欠いている。

教訓・企業としての戦争 ジェイムズが如何に明白な反戦への意志を掲げようとも、戦争を「他の企業と同じようにチェックしなければならぬ」と言っている以上、戦争を一種の企業、つまり経済的な収支決算という観点から見ているにすぎず、そこには真に敵愾な意味に於ける定言命令としての道德律は無い。これでは、いったん核が使われると、結果として元も子もなくなるから戦争

に反対する、という当世風の反戦観と同じではないか。残るものはせいぜい、小市民的な常識的道德の気分——つまり「途方もない野心よりも納得のできる要求」であり、それを支える感情は当時の大統領だったセオドア・ローズベルト張りの「努力でかちとる名譽と無私」(strenuous honor and disinterestedness)にすぎない。これまた、健全なスポーツ程度の感覚である。

だが見逃し難いのは、ジェイムズが到達したこの常識的ルールが「どうして白人諸国だけでなく、黄色人種の国にも適用できないのか、私にはとんと分からねぬ」と聞き直っている事実である。単数形で示された黄色人種の国とは明らかに日本である。ジェイムズが日本を以て、小市民的道德さえも育ち得ぬ凶り知れぬ国、もつとはっきり言えば欧米の基準に合わない国と、見ている事は確かである。

二 ジョサイア・ルイス

日本の武士道への率直な理解 ジェイムズと比較した時、ロイスの反応はまことに対照的で、『忠誠の哲学』では日露戦争の成果を素直に「國民が祖国へ徹底的に忠誠を誓つた結果だ」と評価する。「新渡戸がその小著の中で日本の魂と呼んだ道德的規範である(2.883)と言及している以上、その種本が『武士道』である事は明らかだが、更にこの道德を「驚くべき精神力だ」と肯定しているのである。そこにはジェイムズが抱いたような日本の軍国主

義への動物的恐怖は皆無なのである。だが一方ではその武士道が「多くの反・個人主義的特性 (anti-individualistic features)」を含有している事をも見逃さない。更にこの封建時代の道徳が、例えば

「無智なロシアの農民のように盲目的で感傷的な奴隸根性で自己犠牲に終始している……忠誠心」とは大きく異なっている。「自己主張 (self-assertion) に欠ける所が無い」と聞き直っているのは、実にロイスの卓見である。自己主張の強烈な無私の精神、

という一見矛盾した論理がロイスのヘーゲル張りの観念論の中では、不思議にもプラグマティックによく結びつくのである。その理想主義的な哲学的構造 まず「この理想的な忠誠心が、日本ではある程度まで、人格を埋没させる主義 (a certain imperialism) として考えられている」と把握した上で、「倫理的な主体としての個性 (ethical individual) は相対的に無視されている。私は日本人が個々人の真の価値を正当に認識しているとは思われない」と敷衍する。ここまでの論理は個人主義重視のジェイムズの立場と大差はなく、従って武士道は一種の御用道徳であって、敵

敵な倫理的規範たり得ない、とロイスは見ているのである。それにもかかわらず武士道がある種の道徳である事を認めるのにロイスはやぶさかではない。即ち武士道には定言命令的な倫理性はないが、社会の秩序維持を指向する道徳性ならある、というわけである。それもロイスの論理を辿っていくと、どうやら忠誠という道徳には二種類あると主張しているように思われる。その

一つは言う迄もなく、施政者が強制する所の、政治支配の道具としての、いわゆる忠誠である。二つ目は国民が団結する為に、「個人が大いに發揮し得る創意と柔軟性に他ならず、知的であるだけでなく十分に道徳的 (a vast development of personal ingenuity and plasticity not only intellectual but moral)」である、と押さえられる。私は武士道を以て、融通の利かない剛直な倫理体系と考えていたので、ロイスのこの指摘には狼狽した。とにかく武士道は「個人の判断を抑圧しない」のだから、結局は自身自身の行為に対して忠誠を誓う、換言すれば自分自身の行為に責任を持つ事が武士道の核心にある、とロイスは解釈していたのである。

ここ迄来ると結論は早い。「いわゆる忠誠心によって期待し得る共通善 (the good)」(本来のロイス的な絶対主義的理想主義的立場) と、「個々の成員がそれぞれの立場からあくなき追求をした結果、達成されたさまざまな善の集大成 (the various personal goods)」(ジェイムズの個人主義的相対主義的立場) が、見事に一点に収斂して来るのである。

武士道の物質的代替物 このように武士道の本質が柔軟性にあるという事になると、悪く言えば節操の無さが、良く言えば知的的好奇心が、その生態学的特徴となる事は見易い道理である。論文「地方主義」(Provincialism, 1908) の中でロイスは再びこの柔軟性というテーマを取り上げる。「貴方が少しでも日本人に教える

材料を持って居る間は、日本人も礼儀正しく敬愛をこめて貴方の生徒になつてくれる。そして与えられた凡ての精神的な糧を日本人は自家薬籠中のものにして、解釈し、使用し、所有するに至るのだが、こうなると正に立場が逆転して、日本人の方が教師で貴方の方が生徒になつたのではないか、と思われてくる。^(3, 108)これを現代の脈略に移せば、日本人というものはアメリカからアイデアを盗むと、すぐさまそれを工業製品に仕上げて、儲けるだけだ、というアメリカ筋の非難を想起させる。

そうなると、世界の中で日本という一地方だけが潤うという結果になるのである。正にこういう日本人の民族性を以て、ロイスはこの論文の標題通りに「地方主義」と称したのであって、更に若干、屈折した表現ながら「地方主義とは柔軟性の欠如を意味しない」と敷衍して、この日本人論を締め括るのである。歴史を振り返ってみると日本人の変わり身の早さは正にロイスの指摘した通りである。明治維新で武士道の時代が一瞬にして四民平等の軍国主義に変わり、それがまた敗戦によって一夜にして、民主主義を標榜する企業戦士に変わつて居るのである。そして今や最早、欧米に学ぶものはない、と傲慢不遜に自足する手合いも出現して居るのである。ジャパン・アズ・ナンバーワンの教訓、そしてここからロイスの真骨頂が発揮される。「地方主義」の統篇ともいふべき論文「人種問題と偏見」(Race Questions and Prejudices, 1908)の意図は、ほんのこの前ヴォーゲル教授 (Ezra F. Vogel) が執筆して洛陽の

紙価を高めた『ジャパン・アズ・ナンバーワン』(Japan as No. 1)と同じように、一見、日本の賞讃と見えて、その実、平均的アメリカ人の覚醒を促したものである。曰く、日本人は柔軟であればこそ、日本を向上させようという「地域意識に取り付かれて、独立不羈の精神で」、これまで海外の多くの社会からその精髓を学んだのである。ところがアメリカの社会はその反対で、散漫に放浪するのを良しとする傾向があり、「お蔭で我々の地域社会から、最上の、然ももつとも活動的な青年分子が脱落してしまつたのだ」と結論づける。アメリカの青年が日本人と同じように海外に出ていくこと、それがアメリカという地域の活性化につながる、と見ているのである。この提案はジェイムズをもじつていえば、武士道の物質的代替物とも言えそうな提案で、然もジェイムズの、戦争の道徳的代替物より執筆が一年、早いのである。

然しロイスの日本人評価で悦に入っていたらとんでもない事になる。「彼等は小さな子供のように驚くべき柔軟性を持った民族(4・1093)なのだ」と論理が進展した途端に、我々は称讃の対象となつた筈の柔軟性が、忽ち批判の対象に変わつて居る事実を知るべきである。「猿のような行動の変わり身の早さ」、せいぜいよくて「新しいタイプ(4・1093)のベッグ」で、甘え切つた日本人は愕然となり、西欧社会の「学生」と落着して愁眉を開くのであるが、それにしても学生より教師の方が、一枚、格が上である事は明らかである。だがこのようなロイスの意識を以て、ロイス自身にも人種偏見

があつたと速断してはならない。ロイスは熱烈なクリスチャンであつた。西欧から学ぶ事だけが自己目的で、キリスト教でさえも、「一種の偉大なる利益 (a great good)」^(4.1093) としか把握し得なかつた日本人は、宗教的な立場から見た時、実に不可解な存在だつたのであろう。

こうしてロイスの日本人論の秀抜な結論が出て来る。「日本の様式がやがてアメリカにも這入つて来て、我が国の模倣屋はこぞつて日本人の真似をしようとするかもしれない。だが私自身は他の異質の文明が一時的に優れているからと言って、やみくもに尊敬もしないし憧れる事もない……だが日本人が才能を持っている事は確か^(4.1094)なのである」。他の異質な文明に敬意を抱きながらも、一線を画す、というのである。然も模倣民族という、よく日本人に貼りつけられるデマゴグ的レッテルを、おのがアメリカ人にも貼りつけているのである。こうなると徒らに異質の文化に戦つたジエイムズと違つて、ロイスの方が遙かに優れた比較思想の体現者であつたと言ねばならない。ロイス自身が武士道を評価しながらも、依然としてキリスト教精神をより上位に置いていた事は確かであるが、それでもなお、日本思想を以て、少くとも物質文明発展の爲の一与件と見なしていた事も明らかである。一見、柔軟なプラグマティストのジエイムズより、理想主義者であつた筈のロイスの方が遙かにプラグマティックであつたとは、一種の歴史の皮肉——いや、哲学の皮肉だ、と私には思われるのである。

三 新渡戸稲造

キリスト教の道徳的代替物 紙数が尽きたので新渡戸に就いては結論だけ述べよう。^(5.6)「武士道」によると、この道徳は仏教・神道・儒教・ギリシヤ思潮・ローマ思潮・キリスト教の凡ての要素を含むのである、と述べる。このような夾雑物が武士道の正体であるなら、そこには哲学的構造も宗教的構造もあり得ない。そもそもキリスト教は一神教で、他の要素の混融を許さぬ筈ではないか。然しちょうど内村鑑三 (1861—1930) が一九〇八年に改訂版を著した *Representative Men of Japan* (代表的日本人) がそうであつたように、日本史に登場する人物のある種の行為が、凡てキリスト者の行為と本質的に同一である事を次から次へと例示してみせるのである。だがそれにもかかわらず武士道の中心道徳である「義理は道徳における第二義的の力であり、動機としてはキリスト教の愛の教^(5.2616.40)えに甚しく劣る」事を認めざるを得ない。「功利主義および唯物主義に拮抗するに足る強力なる倫理体系はキリスト教あるのみ……キリスト教と唯物主義 (功利主義を含む) ……は世界を二分するであろう。小なる道徳体系はいずれかの側に与して自己の存続を計るであろう。武士道はいずれの側に与するであらうか……武士道は一の独立せる倫理の掟としては消ゆるかも知れない、しかしその力は地上より滅びないであらう」という、新渡戸の提示した結論は明らかである。武士道をキリスト教の代

替物として、従つて二流のキリスト教として、西欧世界に喧伝するの狙いだったのである。それではその狙いは成功したと言えるだろうか。

新渡戸の認識したものと見損ねたもの 例えば、太田雄三氏は「Josiah Royce, *The Philosophy of Loyalty*」に見られる武士道への短い言及の方が、まだ普遍的な人間の関心から武士道の問題を考えていると言えそうだ……あれほどけんらんたる修辭を駆使して武士道を弁護しながら、新渡戸の『武士道』からは新渡戸自身へ「武士道」の中に本當に価値ある普遍的なものをつかまえている感じが伝わってこない」と批評している。この批評の前半は凡て賛成である。但し後半については少々点がからすぎる。なるほどけんらんたる修辭である事は間違いないが、新渡戸は武士道の評価も賛否こもごも、それなりに行つてはいるのである。

もちろん太田氏の説くように、この書物がある程度まで、軍国主義の礼讃であり、日本の行動の弁明である事はまぎれもない事實である。然しラマルティエヌからの援用で示される通りに、「宗教と戦争と名譽は、完全なるキリスト教武士の三つの魂である」という十字軍的なお手本があるのだからたまらない。『矮小ジャップ』の身体に溢るる忍耐、不撓ならびに勇氣は日清戦争において十分に証明せられた。『これ以上に忠君愛國の國民があらうか』とは、多くの人によりて発せられる質問である^(5.176.16.138)とは、新渡戸の側からみた当時の世界的情況に対する十字軍的解答であつて、新

渡戸だけの責任に帰する事は出来ない。新渡戸の称賛したのは、なによりも勇氣であつた、とも言えるのである。

問題はいわゆる武士道なる道徳の、将来の文明に対する価値評価である。彼はあるアメリカ人が書いたとかいう「もし普通の日本人に対し虚言を言うのと礼を失するのといずれを取るかと質問すれば、躊躇なく『虚言』と答えるであらう」という假言命題に對して一応反發して、さまざまに弁護を試みるが、どうも旨くない。結局は「武士道の信實は果して勇氣以上の高き動機をもつやと、私はしばしば自省してみた。偽りの証しを立つることなかれとの積極的な誠めが存在せざるため、虚言は罪として審かれず、単に弱さとして排斥せられた」事を承認するのである。この事は第二次大戦中の大本營発表が凡て、軍の名譽という礼儀だけにこだわつた、虚偽の大系であつた事を想起すれば、よく武士道乃至日本人の欠陥をついている、と言えよう。

相當にピントが外れていると思われるのは、「武士道は非経済的である。それは貧困を誇る……この故に児童はまったく経済を無視するように養育せられた」の一条である。もつとも「考えのある武士は金銭が戦争の筋力であることを十分知っていたが、金銭の尊重を徳にまで高めることは考へなかつた」と断つているのだから、完璧な経済觀念の欠如が武士の生體であつたと言つてゐるわけではないが、新渡戸のトーンは武士は食わねど高楊子の礼讃である。だが封建時代の歴史を見れば明らかのように主家に

対する忠誠も、所詮は祿にこだわるサラリーマンとしての武士の経済優先主義があったのではないか。興味深いのは新渡戸の提供した二流の情況証拠からロイスは全く違った結論——今日の経済至上主義を彷彿させる日本の柔軟な未来像を描き出し得ているという事実である。もともと新渡戸といえども『武士道』の中で、柔軟性について全然考察しなかったわけではない。「それは成文法ではない……道徳史上における武士道の地位は、おそらく政治上上におけるイギリス憲法の地位と同じであろう」とか、「アメリカ的もしくはイギリス的形式のキリスト教——キリストの恩寵と純粹よりもむしろ多くのアングロ・サクソンの恣意妄想を含むキリスト教——は、武士道の幹に接木するには貧弱なる芽である^(5:180-16)」というような主張は、もっぱらこの謂である。どうやらアングロ・サクソンのキリスト教を柔軟な恣意的体系、ビジネスには好都合でも国家の団結を図るには不自然な自由宗教と考えていたのだ。そのため日本人を以て大陸の「スラヴ系諸国民」と軌を一にするもの、と苦しい解釈をするに至るのであるが、これは実におかしな結論である。何故ならば新渡戸は心の底からの親米派であった筈であり、思うにその自由闊達な民主主義的態度にひげ目を感じたが故に、このような卑屈で消極的な主張になったのではなからうか。日本人では到底、英米人のような個人主義的価値観は身につけ得ないと感じたが故に、このようなピント外れの推定をしたのではなからうか。然し、それからほぼ百年たった現在

日本人の行動様式がスラブ民族よりアメリカ人の方に似ているという事実は、衆目の認める所であろう。

ところがロイスが武士道精神を積極的に肯定したのは、繰り返しになるが、その柔軟性の故である。曾てマックス・ヴェーバー(Max Weber, 1864-1920)は名著『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』(Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, 1905)を著して、プロテスタンティズムの禁欲主義と知識欲が資本の蓄積に向かった事を指摘したが、同じ論調でロイスは「武士道の倫理と資本主義の精神」を論じたのではないか。発表された年代もほぼ同じである。今になってみると少くとも新渡戸の『武士道』よりも、ロイスの諸論文の方が、よりの確に現在の日本人像を描写し得ている事は事実である。本物の日本人よりも外国人の方が、必死になって自己弁明につとめる日本人よりも落ち着いて考察する外国人の方が、よりの確に日本人像を構築し得ているとすれば、これまた、比較思想論の皮肉である。

(1) William James, "The Moral Equivalent of War", in his *The Writings of William James*, ed. John J. McDermott (New York, 1967).

※(1・664)とある時には、注番号(1)の著作の66頁である事を示す。以下、凡て同じ。

(2) Josiah Royce, "The Philosophy of Loyalty", in his *The Basic Writings of JOSIAH ROYCE: Volume 2*, ed. John J. McDer-

mott (Chicago, 1969).

(3) Josiah Royce, "Provincialism", *ibid.*

(4) Josiah Royce, "Race Questions and Prejudices", *ibid.*

(5) Inazo Nitobe, *Bushido: The Soul of Japan* (Tokyo, 1982).

翻訳は(6)矢内原忠雄訳『武士道』(岩波文庫、一九七七年)に
よる。

(7) 太田雄三『太平洋の橋としての新渡戸稲造』(みすず書房、一九
八六年)。

(補注) 最近 *Bushido* の新訳が出た。新渡戸稲造・奈良本辰也訳・解

説『現代語で読む最高の名著・武士道』(三笠書房、一九八九年)。

「近代の合理主義思想の人々にも十分に理解できるように著されて
いる」と高い評価を与えている。

(う)のき・けいじろう、米文学・英米哲学、千葉大学教授